

平成 30 年 7 月 26 日現在

機関番号：13301

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2017

課題番号：15KK0045

研究課題名（和文）3～4世紀中国長江・湘江流域における地域社会・地方統治の研究（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）the Study of Local Administration and Society in Chang-Jiang river and Xiang-jiang river basin from the 3rd to the 4th century in China (Fostering Joint International Research)

研究代表者

安部 聡一郎 (ABE, Soichiro)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：10345647

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

渡航期間： 6ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国湖南省で発見されている後漢・三国時代（1～3世紀）の出土簡牘について、半年間の現地研究機関での研究を通して現地の地理環境・遺構出土状況に関する詳細情報を収集し、基課題での課題である当該時代の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静の解明を推進することを目的とした。21世紀以降の発掘成果により従来の研究成果が再検討されている最中であり、特に墓葬の方面で今後知見の整理・公開が進むことが判明し、郷・丘と地理的環境の関係についても研究成果を公表した。

研究成果の概要（英文）：This research targeted wooden and bamboo slips from the late Han / Three Kingdoms period (1st - 3rd century), which are found in Hunan Province, China. The author conducted this research at a research institute in Changsha for half a year, and collected detailed information on local geographical environment / excavation situation, and aimed to promote the understanding the conditions of local politics and society in the ChangJiang River and XiangJiang River basin during the Three Kingdoms period. The author founded that the results of the historical geography research on the relevant area in the past have been reexamined by excavation results since the 21st century, and the excavation results are going to be organized and released in the future, especially in the direction of the distribution and form of the tomb in Han period. And based on its results, the author also published research results on the relationship between Xiang and Qiu and the geographical environment.

研究分野：中国・漢魏晋史

キーワード：出土資料 走馬楼呉簡 長沙

### 1. 研究開始当初の背景

基課題の基盤研究(C)(一般)(H27~H29)「3~4世紀中国長江・湘江流域における地域社会・地方統治の研究」は、中国・湖南省長沙市で出土した走馬楼呉簡を中心とする後漢末・魏晉時代(A.D.3c-4c)の出土簡牘(かんとく)(以下、魏晉期簡牘と略称。なお中国史では竹簡・木簡等を総称して簡牘と呼ぶ)の実見調査、および地誌・地方志史料と現地調査による地理環境の復元に基づく総合的分析によって、後漢末~魏晉時代の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにすることを目的とするものであり、その基幹は、(1)魏晉期簡牘と歴史地理資料の集成と分析、それを基礎とした(2)実地実見調査に置く。具体的には、第1年度は史料の集成と分析を、第2年度は長沙簡牘博物館・湖南省文物考古研究所等での実見調査に併せ長沙周辺の実地実見調査(1回、1週間程度)を行い、この調査の成果を踏まえ、第3年度(最終年度)に国際学会での発表・海外学術誌での論文公表を計画していた。

しかし第一年度の資料調査および現地予備調査を通して、長沙市周辺の後漢~魏晉南北朝期の関連遺構については広域調査が実施されたのみで正式の報告書が刊行されていないこと、また近年長沙市周辺で急激に進む開発・再開発による遺構破壊などにより、短期調査では現地遺構の正確な位置や状況を十分に把握できないことが判明した。現地地理環境の把握を行うには、現地に長期間滞在して現地研究者との協力関係を築き、これにより資料・情報の収集と実地実見調査を行うことが不可欠であった。また走馬楼呉簡中の地理環境に繋がる史料として、基課題にて実施した郷丘関係の検討より、郷丘関係には地理的關係だけでなく郷における戸口把握・編成の問題などが複合しており、その理解のためには同じ湖南省で魏晉期簡牘を出土している益陽市などの事例との比較が必要であることも明らかとなった。

### 2. 研究の目的

本研究は、上記背景に基づき、基課題のうち特に実地調査による地理環境の復元作業について、基課題の第一年度の研究で得た新知見に基づき、対象範囲に同じ湖南省で魏晉期簡牘を出土している益陽市などを新たに加えた上で、半年間の現地滞在を通し、現地研究機関・研究者から日本では得る手段のない現地の地理環境・遺構状況に関する詳細情報を収集し、各地域の比較検討を行う。このことを通し、長沙のみならず周辺の湖南省各地域の地理環境との具体的連関の中で走馬楼呉簡を理解する方法を示し、当該時代の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究は、背景で述べた基課題第一年度の

知見を踏まえ、長沙市周辺に加えて益陽など同じ湖南省で魏晉期簡牘が出土している地域を対象とし、六ヶ月間の現地滞在研究を実施した。まず本研究実施の拠点として湖南大学岳麓書院を選び、陳松長氏(湖南大学岳麓書院副院長)に訪問学者としての受入を打診し、内諾を得た。湖南大学岳麓書院を研究拠点とした上で、地理環境、および現地遺構状況に関する詳細情報収集について、湖南省文物考古研究所の張春竜氏(同所研究員)および長沙簡牘博物館の宋少華氏(同博物館研究員・前副館長)に補助的な協力を得る。以上により、資料・情報の収集と現地実地調査を行う。これにまず前半3ヶ月を充てる計画とした。あわせて、長沙市周辺より益陽など湖南省の魏晉簡牘出土地に範囲を広げ、出土資料の内容および周辺地理環境に関する追加調査を実施する。これに続く2ヶ月を充てる計画とした。この成果を総括し、国際学会での発表・海外学術誌での論文公表を準備する。この成果のまとめに1ヶ月を予定し、合計6ヶ月滞在の計画とした。

### 4. 研究成果

2016年10月末に長沙に入ってから以降、湖南大学岳麓書院簡帛文献研究中心を研究拠点とし、その研究資源を活用して研究を実施するとともに、長沙簡牘博物館、長沙国考古遺址公園事務所、長沙市文物考古研究所(以上3機関は長沙市に属する)ならびに湖南省文物考古研究所を訪問、実見調査・聞き取り調査を実施した。またほかに関係する活動としては、図書(1)の論文を完成させたほか、2017年1月6日~12日に簡帛文献研究中心で開催された岳麓秦簡(五)審訂研読会に出席、また2016年11月24日~29日に南開大学(天津市)を訪問してシンポジウムに出席・コメントを担当し(学会発表(4))、12月2日~4日は北京師範大学(北京市)を訪問しシンポジウムに出席した。

長沙市所属の機関では、主に近10年の長沙市周辺での考古発掘状況とそれに伴い新たに判明した事柄についての調査を実施した。具体的には、長沙簡牘博物館では主に長沙走馬楼三国呉簡の調査およびその整理状況や長沙市内遺跡発掘状況に関する聞き取り、長沙国考古遺址公園事務所では湘江西岸を中心とする長沙市周辺の遺跡発掘状況に関する調査、長沙市文物考古研究所では新規公開された尚徳街東漢簡牘の実見調査と1990年代以降の長沙市およびその周辺での考古発掘状況に関する調査である。なお2016年12月22日~25日には研究分担者として参加する他科研と合同で、長沙簡牘博物館にて走馬楼呉簡の実見調査を実施、その成果は2017年2月に報告した(学会発表(3))。

湖南省所属の湖南省文物考古研究所では、益陽出土簡牘の整理状況、ならびに課題に係る戦国~魏晉南北朝期の考古発掘・資料整理状況について調査を実施した。

これらの調査により今回明確となったのは、黄綱正ほか著『湘城滄桑之變』(湖南文芸出版社、1996年12月)およびその出版前後の時期に公表された漢・三国期長沙周辺の歴史地理に関する研究は、21世紀以降の考古発掘成果によって今まさに大幅な見直しを迫られている最中だという事実である。その一端は近刊の黄朴華主編『長沙古城址考古發現与研究』(岳麓書社、2016年12月)においても示されていたが、従来城壁の位置を推定するにあたり主要根拠とされていた知見が全面的な再発掘によって覆されているほか、城外の防衛・駐屯拠点たる戍の比定も成り立たなくなるなど、長沙市周辺の地理の中で長沙呉簡の理解を図る本研究に深く影響する内容であった。併せて、長沙の漢代墓葬に関する体系的な研究書の刊行が近く予定されており、墓葬分布や形式の方面で知見の整理・公開が進むとの情報提供も得られた。以上の成果より、資料公開状況・研究状況の変化に対応し本研究の今後の深化を図るには、成果公開が近々に予定されている墓葬に関する側面から行うのが適切と考え、上掲各研究機関の研究協力者よりこの方面での今後の調査・研究に関して協力の内諾を得、2017年4月末に帰国した。

以上の現地滞在研究の成果により、基課題において検討課題としていた皇城・穀倉・交通路等の位置比定については引き続き今後の研究課題とせざるを得なくなったが、しかし現状で可能な位置比定の試みとして、大木簡(嘉禾四年嘉禾吏民田家荊および嘉禾五年吏民田家荊)中の各田土の町数・畝数から窺える丘ごとの地勢と長沙周辺の地勢状況を比較対照し、これを基課題の研究成果と関連づけることによって、郷の位置、ならびに各丘の性格の推定を行った。この成果が学会発表(1)である。

走馬楼呉簡の大木簡には、それぞれ各人がもつ田土の畝数(面積)と町数(田土区画数)が記されているが、ここから1町あたりの畝数を計算することで実際に存在する田土のありようを推測し得ることが従来から指摘されている。本発表ではこの指摘に基づき、まず各丘ごとの1町あたり畝数の分布状況をグラフ化し、これを図書(1)の論文に示した郷・丘関係のデータと照合し、郷との関係状況を踏まえつつ傾向分析を行った。その結果、丘ごとだけでなく郷ごとにも一定の傾向の差が現れており、一部の郷で嘉禾四年から嘉禾五年に1町あたり畝数が半減する現象が起きているにも拘わらず分布傾向そのものには四年と五年で違いが現れないことからみても、丘と地理的環境の関係は否定しがたいことがまず確認された。長沙故城の南・東方向は丘陵地帯だが、北方向は多く低湿地帯が広がるという地勢の違いを念頭におけば、こうした分布傾向はこの地勢の違いと対応している蓋然性が高い。ついで中郷と関連する丘の他郷との関係状況の整理から、複数郷に

またがる丘は人間の移動などに伴う処理として行われた結果としてばかりでなく、実際に隣接郷にまたがっていたとみられる丘も存在しており、それは史料点数の多寡とも対応していることを明らかにした。

基課題における検討では、郷・丘の関係は従来考えられていた以上に極めて錯綜しており、現代における「冲」(丘陵地帯の谷状の地形を指す地名)を参考としてこれを把握する従来の考え方で一面的に理解できるものではないことが明らかとなっているが(図書(1)の論文)、上述の学会発表(1)の検討からは、一方で丘は地理的環境とやはり無関係ではなく、推察される郷・丘の地勢は長沙周辺の地勢と一定の対応関係があり、そこから位置関係を把握し得る可能性があることを明らかにすることができた。このような状況を如何に理解すべきかについては、雑誌論文(1)において、五一広場簡・東牌楼東漢簡牘など走馬楼呉簡に先行する長沙出土簡牘を利用しつつ後漢時代前半期(2世紀初頭)からの丘の展開を概観し、当初走馬楼呉簡段階の特色とみえた郷・里と丘の組み合わせによる人と田土の把握システムが、実際には後漢時代以来の政治・社会情勢の変化の中で混乱し限界に達しつつあった姿と考えられることを指摘した。

既述の通り、以上で明らかになった論点には、田土の把握の問題と人の把握の問題の両面が深く関わっている可能性がある。基課題が当初目標とした郷・丘および穀倉・交通路等の具体的位置の把握は、その基礎とすべき考古発掘成果が大幅な見直しを迫られているという予想外の状況があったため具体化には至らなかったが、特に丘と人的把握の問題という点では、近日中に公刊予定の長沙周辺の漢墓に関する包括的な成果が注目される。この観点から、次の段階においては、この人的分布・人的把握の方面から長沙周辺の漢墓に注目し、引き続き長沙の地理的環境のなかで走馬楼呉簡を把握し、後漢後半から三国・西晋期の長江・湘江流域の地方政治・社会の動静を明らかにしていく。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 安部聡一郎、「走馬楼呉簡からみる三国呉の郷村把握システム」、『アジア遊学』213号(魏晉南北朝史のいま)査読無(依頼原稿) 2017年、pp.247-256。

〔学会発表〕(計4件)

- (1) 安部聡一郎、「長沙走馬楼三国呉簡嘉禾吏民田家荊中所見的“丘”再考察——以畝数/町数數據為線索」,中国魏晉南北朝史学会第十二届年会暨國際學術研討会、中国・河北省邯鄲市・滏泉湖度假村嵩景楼酒店、2017年8月17日。

- (2) 安部聡一郎、「漢三国期長沙地域からみた走馬楼呉簡」 長沙呉簡研究会 2017年7月例会、東京・桜美林大学四谷キャンパス、2017年7月1日。
- (3) 安部聡一郎、「2016年12月長沙簡牘博物館実見調査報告」 長沙呉簡研究会 2017年2月例会、東京・桜美林大学四谷キャンパス(海外渡航中につきレジュメでの参加)、2017年2月4日。
- (4) 安部聡一郎、「評議：孫正軍《被裹挟的司馬妙玉 - - 讀新出《元忠暨妻司馬妙玉墓誌》》」, 中古社会史研究再出发-第三屆古史新銳南开論壇、中国・天津市・南開大学津南校区、2016年11月27日。

〔図書〕(計1件)

- (1) 長沙簡牘博物館編、中西書局、『長沙簡帛研究國際學術研討會論文集』、2017年、pp.1-555。安部聡一郎、「長沙走馬楼三國呉簡中所見“郷”與“丘”對應關係的再研究」, pp.119-132。

〔産業財産権〕

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安部 聡一郎 (ABE, Soichiro)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：10345647

(2) 研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕

- (1) 陳松長・湖南大学岳麓書院簡帛文献研究中心・教授